シリーズ第36回

笛吹市探訪

武田氏と笛吹市⑬

―武田勝頼の遺言～慈眼寺（じげんじ）（一宮町）―

慈眼寺尊長書状案文

戦国最強とうたわれた武田の騎馬軍団。特に元亀（げんき）3年（1572）12月に行われた三方ヶ原（みかたがはら）の戦いでは、徳川家康を完膚（かんぷ）なきまでに破り、その強さを天下に示しました。しかし、元亀4年4月に信玄が亡くなると、時代は大きく動きます。信玄の後は勝頼が継ぎましたが、天正3年（1575）長篠（愛知県）で織田信長・徳川家康の連合軍に敗れ、信玄以来の多くの家臣を失いました。勝頼は支配体制の強化や家臣団の世代交代を図るなど形成挽回に力を注ぎましたが、天正10年（1582）1月に親族衆である木曽義昌の謀反（むほん）をきっかけに、織田・徳川を中心とした連合軍が武田家へ総攻撃を開始します。そして3月11日に田野（甲州市）で勝頼はわずかの家臣とともに果て、武田家は滅亡しました。

和歌山県にある真言宗の総本山高野山金剛峯寺（こんごうぶじ）。奥の院へ続く参道には2万を超える墓石が立ち並び、織田信長や豊臣秀吉の墓、上杉家の廟所（びょうしょ）とともに武田信玄・勝頼親子の墓も建てられています。武田家は一宮町末木にある慈眼寺を通じて、高野山に先祖の供養を依頼していました。高野山側の窓口は成慶院（せいけいいん）・引導院（いんどういん）（現持明院（じみょういん））という2つの宿坊（しゅくぼう）で、そこには武田家関係の遺品が数多く残されています。

勝頼は最期にあたり慈眼寺の住職であった尊長（そんちょう）に、信玄・勝頼の遺品と黄金10両を引導院に送り届け、自らの供養を行うようにと依頼しました。尊長は大病を患っていたため、4月15日に人に託して遺品と黄金を引導院へ送り届けました。

引導院を引き継いだ持明院には、尊長から送られてきた書状と遺品の数々を書いた回向注文（えこうちゅうもん）が残されています。慈眼寺には、この時の書状と回向注文の下書き（案文）が残されています。

回向注文に書かれた遺品の最初には、「勝頼公并御臺所御曹子寿像一幅（かつよりこうならびにみだいどころおんぞうしじゅぞういっぷく）」とあります。これは現在も持明院に伝わる「武田勝頼・同夫人・信勝（のぶかつ）画像」であることが分かります。

慈眼寺は、この天正10年に織田軍の兵火により諸堂を焼失しました。その後、甲斐国が徳川氏の支配下に入ると、再び寺領の保護を受けるようになります。現在の本堂・庫裏（くり）・鐘楼門（しょうろうもん）は江戸時代の初期に再建されたもので、国の重要文化財に指定されています。

慈眼寺庫裏（重要文化財）